



Title	『傾城三度笠』考
Author(s)	富田, 康之; Tomita, Yasuyuki
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 132, 173(右)-194(右)
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44298
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS132_004.pdf



『傾城三度笠』考

富田康之

はじめに

紀海音作『傾城三度笠』（正徳五年秋以前〈推定〉・豊竹座初演⁽¹⁾）は『冥途の飛脚』（近松門左衛門作、正徳元年初秋以前〈推定〉・竹本座初演）の改作として成立したとされる。とは言え、海音の作り上げた作品は近松のものとはかなり異質なものとなっている。その改作の評価について言えば、「原作「冥途の飛脚」が比較的自然に筋を運んでいるのに対して、本作（『傾城三度笠』筆者注）では、良きにつけ悪しきにつけ、いわば理詰めの筋展開で、情趣に欠ける反面、「芝居がかつた」改作は成されたと評価できよう⁽²⁾。」であるとか、「海音世話浄瑠璃の三作目であり、『冥途の飛脚』には比較すべくもない未熟な作である。（中略）海音は、事件や趣向の立て方には巧みで、おもしろい点も多いのであるが、ただそれを並列的に繋いでいくだけで、その間の劇的展開をはかるに十分でない⁽³⁾。」などとされる。『冥途

の飛脚』に視点を据えて『傾城三度笠』をみれば、このような評価がなされるのは首肯されるものではある。しかしながら、海音には海音なりの創作方法があるはずであり、近松の評価基準をそのまま海音に当てはめることは必ずしも適切であるとは思わない。そこで、この作品での「芝居がかった」構想、あるいは「事件や趣向の立て方」そのものを具体的に考察し、海音の創作方法、並びに海音の志向した世界を明らかにしてみたい。

一 おとらと新七の恋

『冥途の飛脚』は梅川、忠兵衛の恋が描かれるのに対し、『傾城三度笠』では梅川、忠兵衛の恋と、そしておとら（忠兵衛の許婚）、新七の二組の恋が仕組まれている。通常、世話浄瑠璃の構想について言えば、男女二人の問題（心中等）が集約的（あるいは統一的）に構想され、その結果、主題が分散することを防ぐことになる。悲劇を志向するには不可欠の条件と言ってもよい。ところが海音の『傾城三度笠』では二組の男女の恋を扱う構想となっており、最初から主題が分散する可能性を孕んでいるのである。もともと、おとら、新七の恋は梅川、忠兵衛の恋と比較してみればその扱いは軽い。しかしながらやはり分裂の可能性は含まれているのである。海音がその分裂の可能性を理解していなかったとは考えにくい。そうであれば何故海音はそのような分裂の可能性を含み込みながらも、この構想を展開したのかという点が問題として浮かび上がってくるのである。そこで、出来る限り海音の表現に即しつつ、二つの恋の展開を分析してみたい。

『傾城三度笠』上之巻、忠兵衛の留守中におとらが新七という恋人と連れ立って忠兵衛の母（おとらのおば）に会い

に来る。おとらと新七の用向きは、おとらと忠兵衛との間にある婚姻の約束を白紙に戻してもらうことであつた。唐突なこの頼み事は、観客にとつてもあまりに唐突な展開であつた。そもそも『傾城三度笠』という作品は、その名称から梅川、忠兵衛の物語として理解されていた筈である。それが最初から当事者ではない人物の、しかも穏やかではない事件から始められるのである。当然、観客は最初から当惑させられることになる。しかしながらこれは正しく海音の狙いと言つてよいであろう。『冥途の飛脚』の改作ではありながら、決して近松の驥尾に付すというものではなく、海音独自の作品を作り上げようとの意思が読み取れるのではなからうか。

さて、この時の新七の態度・発言は次のようなものであつた。

男こしをかゞめ。お前がおとらがおぼでござりまするか。私義は新七と申て三輪のほとりの者。是成女とは三年前より人しれずふう婦のけいやくいたし。かくすことなれはおや立にも御ぞんじのふて。せん比御子息忠兵衛殿へこんれいきはまり。印の樽もおさまりし上は某ふつつと思ひ切候へ共。女心の一筋に拙者にそはずは身もほろほすべきとなげきしがふびんさに。二三日いぜんに所を立のき候へ共。(中略)見付られ次第にとがにおこなはれんはしれたこと。然る時には一門一家のちじよくと思ひ。互にかくごきはめしうへ。はぢをすて、今日は参りしも。他人なれば了簡におよばず。おば様と有を力にて一ツたんおわびに参りたり。(中略)おば君のお情にゆるめん有て給はれとみんぎんにこそ申ける。⁴⁾

新七の態度・発言は全く申し分のないものであつた。まず「こしをかゞめ」る態度から始まり、言葉遣いにもそつがない。また、発言内容に目を向ければ、忠兵衛とおとらの婚姻の約束より、おとらと新七の夫婦の契約が先であるという理屈も尤もである。その上、忠兵衛との婚姻が決まったからには、新七はおとらを「ふつつと思ひ切」ろうと

した。これだけの周到さを以て談判に來たのであつた。この新七の「みんぎん」な態度は、おばに「どなたかほぞんぜぬがはつめいそうな御口上」と言わしめるのである。しかしながらおばはおとら新七の二人の關係については「めなしおなしの時分には。有まい事でも候はねばその所はとがめませぬ。」としながらも、「今ではわが子の女房と名の付て有とおとらをは。つれのき給ふ御所存はふぎてないとは申されまい。」と非難している。そして、「めいがふびんに候へは。おんみつにしてやりましようたがいふつつと思ひ切。おとらを早くおや里へもどし給へ」と捌いた。おばと姪の關係も相俟つて穩便に対処しようとして試みたのである。このおばの対応は、おとらにとっては予想外のものであつた。おとらはこのおばの言葉に力を得て、更に自分と新七の仲を認めてもらうように頼み込むのであつた。その説得の中で「忠兵衛様もね心はわしを女房にもつことは。いやがつてじやときいてゐる。其はづのこと新町の梅川といふ女郎と。二世のきしやうをかいてじやげな。」と発言している。観客にとつてこの情報は、おとら新七の恋に対する印象を極めて好意的なものへと導いたであらう。このおとらの発言に対し、おばはおとら（及び新七）に厳しい意見ををして、おとらと新七の仲を断ち切ろうとする。それに対して新七はおばを説得することが困難であると判断し、おとらを引つ立てて出ていこうとする。とは言え、新七の態度は冷静であつた。詞章には「新七詞をしづめつゝ。只今の一言にちといひぶんも候へ共。高がわれらがむりなれば云わけもいらぬこと。所せんかなはぬ上からはながいはむやくサアたちや」とある。飽くまでも自分達の側に非があることを認めつつ、おばの針を含む言葉にも抗うことがない。「はつめいそうな」新七に似つかわしいものであつた。

さて、おばはここですぐさま二人を押し止めた。このおばの態度は、おとら新七が「おばが心のやわらがずはしなふとかくごきはめし」と推量してのことであつた。そして忠兵衛の嘆きを思いやりつつも、おばは自ら離縁状を認め

ておとらに手渡すことになった。おとらは「命二つを御しやめんのおぼのみぎやうしよいたゞきて。心しよぎくいとそく」と帰って行くのである。おとら新七の恋はこの詞章より判断して、恋が成就しない場合には二人は心中する決意であつたということになる。観客はそのように判断することを求められるように表現されている。そのように考えれば、この二人は心中物浄瑠璃における中心人物にも代替可能な設定であつたことになる。最初に記したように、この二人はこれ以後、下之巻まで登場しない。扱いが軽いつたのはその意味においてである。とは言え、心中を考へた二人の男女が、命をかけて説得に来る構想は、書き様によつては中心人物にも成り得る要素を十分に含んでいたはずである。構想の分裂の可能性はまだそのまま残されている。海音の意図はまだしばらくは見えてこない。

二 忠兵衛への不審

おとらと新七が離縁状を受け取り退場した後、忠兵衛が旅から帰宅する場面となる。忠兵衛は財布を取り出し、「扱此さいふは伊丹のかはせ金四百五十両。戸棚へいれて給はれ」と母に言葉をかけるのであるが、母親は「物思はしき有様」で答えない。『冥途の飛脚』を既に見た観客は、この為替の四百五十両という大金に、近松の封印切りの趣向を思い起す者も多かつたのではないかと考えられる。海音も意識的にこの金を取り上げていると言えよう。とは言え、海音は近松と同じ趣向で展開させようとはしない。『冥途の飛脚』を観客に敢えて意識させながら、それをずらして構想することにより、却つてその違いを意識させようと試みるのである（このやり方は、例えば海音作『今宮心中丸腰連理松』の「白人三部経」を近松作『曾我扇八景』の「傾城三部経」を基にして作り上げた方法と共通する所がある）。

さて、母親は忠兵衛に事の顛末を話し、「いとまの状」を渡したことも告げる。これを聞いた忠兵衛は「私女房もつ事は中間のものにしたらぬはなく。祝義の樽も二三軒から越ました。今更ぬすまれたといふて一分が立ませふか。私は子ながらも他人。とらめはしんじつのお前のめいなれば。身共がすたる一ぶんよりとらが難儀が御ふびんなか。あんまりそれはどうよくとにがり切て」答えるのである。母親はこの忠兵衛の発言に対し、「真実の子と思ふゆへ。心やすさのあまり」にした事と答え、更に離縁状を取り返す代わりに、それが「親子の別れ」と思うようにと言うのであった。忠兵衛はその言葉に驚き、母親の指図に従うことを表明する。ここでは観客は忠兵衛の言葉に一抹の不審を覚えることになる。というのは、先にも触れたおとらの言葉にもあったように、梅川と二世の契りを結んでいた忠兵衛にとつて、許婚のおとらの存在は極めてやつかいなものであった筈である。その許婚と何の造作もなく関係を断ち切ることができた訳であるから、本来ならば飛び上がらんばかりの喜びがあつてもおかしくはないであろう。にも拘らず、忠兵衛は「にがり切て」母親に訴えたのである。観客は、忠兵衛の一分が立たないことの怒りが、梅川との恋を凌ぐものであつたのかという点に不審を抱くことになるのではなからうか。

しかしながら次の展開ではこの一分の問題は全くあつさりとはぐらかされてしまう。母親が親子の別れを持ち出した途端、忠兵衛はすぐさま怒りを納め、母親に詫びることになる。そして、母親が「アノいたづらなとらめより。百そらばいもよい女房を。よんでやらふ」との言葉に乗り、すぐさま「其お詞にあまへさつそくなれどちとおねがひがござります。さる女郎とふつとした。ふうふやらのやうな義をいたし置候。あはれおゆるしあれかし」と頼み込むのである。あまりの変わり身の早さにやはりここでも観客の不審が募ることになる。ただ、この態度の変わり方は、一つには次の展開のために必要な設定であつた。というのは、ここで母親は梅川に触れ、その梅川は忠兵衛の親しい友人

である利右衛門が身請することになり、手付金のことと家庭内の揉め事になっていると話をするのである。つまり、梅川の現在の状況を忠兵衛に知らせる仕組みとなっていたのである。とは言え、それは飽くまで作り手側の問題である。やはり観客は不審を抱いたままの状態に置かれることになる（実は、この不審は中之巻になってようやく晴らせることになる）。

さて、上之巻では二組の恋の展開が仕組まれていた。おとら新七の恋は、死を覚悟した段階から始められ、おばの情によって心中を回避するとともに、晴れて夫婦として出発する機会を与えられた。この二人の恋は、上之巻で全てが解決されることになる。一方、忠兵衛と言えば、梅川との恋が母親に認められなければかりか、自分の親しい友であるはずの利右衛門が梅川を身請すると聞き、二重に裏切られた思いで一杯になり、「ふみころさん」との思いで飛び出して行こうとする。この決行に「銀づくのつめひらき」で邪魔が入らないために、戸棚に仕舞った伊丹からの為替金四百五十両の入った財布を持ち出し、自分の首はないものとの決意のもとに、ついに梅川と利右衛門に会いに行くのであった。

忠兵衛の母親の梅川についての発言は、忠兵衛を逆上させるのに十分なものとなっていた。それは、母親の発言の信憑性に関わる問題ではなく、忠兵衛自身の性格によるものとして観客には理解される。それは忠兵衛の「短気」な性格である。忠兵衛の短気については、すでに白方勝氏が『傾城三度笠』の忠兵衛に『じびやうのたんきがさしおこり』と言わせているのは、明かに『冥途の飛脚』を踏まえたせりふである。⁽⁶⁾と指摘している。短気である点については、この指摘の他にも「心みぢかき忠兵衛が。世間のはぢて思はざる。なげきやみん」（上之巻）と忠兵衛の母の言葉にも見てとれる。分別のある者であれば、母親の発言の真偽をまず確認してもよさそうなのであるが、その分別な

しに一気に為替金四百五十両に手をつけるという行為は、忠兵衛の性格にこそ原因があるようにして描かれているのである。その性格と二人の恋はどのように展開していくのであろうか。次に中之巻の状況を考察してみたい。

三 忠兵衛の誤解

忠兵衛と梅川の恋の展開を見る前に、忠兵衛の「短気」以外の性質がどのように設定されているのかを確認しておきたい。というのも、近松の『冥途の飛脚』の忠兵衛とどのような関係になっていくのかを明らかにし、海音の意図を探り出したいと思うからである。『冥途の飛脚』の忠兵衛については、以前、拙稿「『冥途の飛脚』考」^①で述べた。ここでは、忠兵衛は二つの大きな要因によって性格設定がなされていることを指摘した。一つは「田舎出身」であること。もう一つは「養子」の身分ということである。『冥途の飛脚』の忠兵衛が何をするにもそつがなく、田舎出身でありながらも都会人より都会的なセンスを持ち合わせた人物として紹介され、「養子」の身分でもあるがためにそれが逆に負い目としてあり、それが極めて強く一分意識に影響していたのであった。では『傾城三度笠』の忠兵衛はどのように設定されているのであろうか。

『傾城三度笠』では、上之巻の幕開きでは、『冥途の飛脚』と同様に飛脚宿が場面として設定され、朝早の状況が描き出される。そこに「年はさだかにみへぬ女房」が現れる。「わたぼうし」に人目を隠した姿で「忠兵衛様はおるすか」と尋ねかける。手代の三郎兵衛が「おるす」と答えると、今度は「しからばおふくろ様にあいまいたい」と頼む。このやり取りの中で三郎兵衛は次のように答える。

旦那にあいたそうなものがお袋様にあいたいと。扱は旦那が子かなはらませて。頃日便りもないゆへに腹立まぎれにかみ様に。いふてはぢをかゝしよとの事か。それはあまり一けうな。いかに思へはとて江戸からあひにもこられまい。此すいがのみこんだ今でも帰られたら取持て。うみりやうでも取てやる。あとなは家守殿かもがり殿か。ゆすりなどくふ三郎兵衛ではない。出ようがよければ沓歩や二歩は取かへてもやるふ。何ぶんこよひは帰られよ

ここに訪ねてきた女性はおとらである。三郎兵衛はおとらの「おふくろ様にあいたい」との発言に、「扱は旦那が子かなはらませ」たとすぐに推量している。三郎兵衛の早とちりは観客に笑いを誘う場面となるが、この発言の背景を考えるに、やはり忠兵衛の性格、あるいは素行を物語っているものとも考えられよう。もつとも『冥途の飛脚』冒頭でも、為替金の催促の場面に続いて忠兵衛の母（妙閑）が店の者に対し、「忠兵衛は筆者注」いつのまにやら大気に成。のべのはな紙二枚三枚手にあたり次第。かさねながらはなかみやる。過ゆかれしおやじの咄に。はな紙びんびとつかふ者はくせ者じやといはれたが。忠兵衛が内を出さまにのべ三折ぶゝ入て出て。何程はなをかむやらもどりに一枚も残らぬ。身が達者なのわかいのとてあの様にはなかんでは。どこぞで病も出ませふ⁸と話す。この妙閑の発言に対しては、「でつち小者もせうしが」ることになる。はな紙の使用方法に誤解をしている妙閑に対し、観客も思わず苦笑するところであろう。近松の仕組んだ笑いの要素については、海音も同じように仕組んでいることが確認できたが、両者の忠兵衛に対する意味合いは同じではない。『冥途の飛脚』の忠兵衛の場合、そのはな紙が梅川との関係の深さを印象付けるのに対し、『傾城三度笠』の場合、梅川とは別の女性との関係をも印象付けることになるからである。勿論、『傾城三度笠』の場合、この段階で忠兵衛と梅川との関係を家人は知らなかったかもしれない。しかし、そ

うであつたとしても、忠兵衛が女性に対して誠実な性格として設定されているとは考えにくい表現となっている。

忠兵衛の「短気」な点、また、忠兵衛に不審な言動があることは既に指摘した。そして今、忠兵衛の女性に対する誠実かどうかの問題をも含めて総合的に判断した時、観客は忠兵衛に対して特段の同情心が湧くようには作られていないことが分るのである。

さて、それでは忠兵衛と梅川の恋の展開を辿っていこう。中之巻、冒頭部分では、

(前略)そね崎の。よねに身をうつきやくも有。恋の誠のかたまりはくるはとすいが定めおく。せけんのいきぢ友立のぎり一へんに利右門マヤは。しゆびそこなふてかねすてゝよるひるはまる此里の。思はくならぬ(後略)

とあり、最初の部分で梅川と利右衛門との関係が、母親の情報とは全く異なるものであつたことが判明する。梅川と利右衛門との恋の関係は、この物語には不必要なものとして最初から観客に情報が正される。つまり、残る問題は忠兵衛の誤解だけとなつた。それこそがこの展開の中心的趣向として仕込まれていることになる。冒頭部分では、梅川と利右衛門が金の工面で行き詰つてるところ、花車が梅川の気晴らしにお気に入りの清都の三味線を聞かせるべく呼びにやり、清都の「栄華の春」の一節を歌い出す。この中之巻冒頭の趣向は、『冥途の飛脚』中之巻冒頭で、竹本頼母の弟子という禿が三味線を弾きつつ浄瑠璃を語るという趣向を利用したものである。この禿の浄瑠璃は、

けいせいに誠なしと世の人の申せ共。それは皆ひがことわけしらずの詞ぞや。(中略)あふことかなはぬ男をば思ひくゝて思ひがつもり。思ひざめにもさむるものつらやじよざいとらむらん。(中略)つとめする身の持病かと。恋にうき世をなげくびの酒も。しらけてさめにけり。

とある。まさに梅川の「恋にうき世をなげく」心情と重なるものであり、浄瑠璃劇中の浄瑠璃がうまく活かされた仕

組みである。ところが『傾城三度笠』の場合、清都の歌の内容は次のようであった。

むかし／＼とつとのむかし云置し。うき世のたとへ世話詞。なん／＼ならべて申べし。すぎわひは草のたね。か
せぐにおひつくびんぼなし。ひんすりやどんする長はんがあてのみ。がんは八百矢は三本（中略）やぶに万ぐは
んやぶからぼうおたからぼう。ふりこめさ／＼。とかくたはむれあそべゑ。

花車は利右衛門が金を整えればすぐにも身請が済むことになり、「此里の名残にわつさりとさ／＼もあげましたし。梅川様のおきに入の清都のしやみせんを。又き／＼に御出もまれにあらふ」との思いで呼んだものであった。よつて、ここでの清都の歌はしんみりと心に響くものとは違い、ひたすら面白可笑しい内容であった。

ところで、世話浄瑠璃中之巻冒頭部分で笑いの要素を含んだ趣向を仕組むものには、例えば『心中天の網島』（享保五年・竹本座初演）が挙げられる。治兵衛の店に仕える使用人の阿呆の三五郎が、子守もろくにできずに軽口をいう場面は、次に続く深刻な場面への導入部として緊張感を一旦解す機能として理解できる。ということは、中之巻冒頭部分の趣向は何かしら決まった趣向があるわけではなく、それぞれに構想されていると言つてよい。とすれば、『冥途の飛脚』の滅入るような浄瑠璃語りを近松が仕組んだのに対し、海音は敢えて笑いの要素を含んだ趣向に転換したものと考えられる。海音は『冥途の飛脚』を利用しつつも、近松の方向とは異なる作品を志向したものと判断されよう。清都の歌が終わると、廓の亭主の喜平治が戻り、利右衛門に梅川の身請金についての話をする。手付の三十両は渡したものの、残りの金の工面ができずにいたのである。明日までとの催促に、利右衛門は間に合いを言つてその場を凌ぐことになる。梅川は狼狽しながら利右衛門に判断を仰ぐが、利右衛門も金に詰まりどうしようもない状態であった。利右衛門が梅川の身請金の手付を払つたのは、梅川に別の男からの身請の相談があり、それを阻止するためのも

のであったことがここで語られる。「こんな時こそ友達の役と思ふて忠兵衛に。とう迄もなく留守の間に「請出」したのであった。とは言え、金に窮して「おんがあだとはか様なことなま中な事仕出して。世けんの取沙汰忠兵衛がむねんの上めにんぼくを。うしなはするもわれがとが」と強く責任を感じるようになる。利右衛門の手柄が極めて理想的なものとして表現されている。この手柄の設定は、いかにも理想的過ぎる嫌はあるが、この設定は後の場面に活かされることになる。

利右衛門と梅川が思案に暮れているところ、忠兵衛が登場する。利右衛門は忠兵衛が来たことを察知すると、「なむ三ばう忠兵衛が尋てきた。めんぼくなふてあはれぬ」と炬燵の内に隠れてしまう。忠兵衛は走り寄つて来た梅川を突き倒し、「おれよくたけ」と足で踏みつけにする。事情が呑み込めない梅川は忠兵衛に問い質すが、誤解したままの忠兵衛は逆上したまま利右衛門を引き出せと言つて梅川を睨みつける。ここから忠兵衛の誤解が解けるまでの遣り取りを細かに見ていきたい。巧妙に会話が擦れ違い、誤解が解けないように長々と展開するのである。梅川は「扱は身請のあらましを。きゝはつりての腹立かそんならそふといふたがよひ。それについては利右門様段々のお世話にて。お宿の首尾もかまわずによるひる是にござんすに。あふて御礼をいわんせ」と言う。この発言では、他の男からの身請を阻止するためという利右衛門の目的が語られていない。肝心な部分が隠蔽されているのである。とは言え、梅川の「身請のあらましを。きゝはつりての腹立か」という言葉を落ちついて聞くことができたならば、このような誤解はおきなかつたであろう。その可能性を低めるためにも、海音は忠兵衛を「短気」とすることが必要だったのである。『冥途の飛脚』で使われた「たんきはそんきの忠兵衛」という一度きりの表現を、海音は強調して利用することによりこの場の展開をなるべく自然なものにしようとした。

さて、忠兵衛は梅川の発言を嘲笑い、「さすがはけいせい程有てよふうちあけて白状した。」と皮肉り、布団を捲り上げて利右衛門を見つける。忠兵衛は当然のことながら、まだ利右衛門と梅川の仲を誤解したままである。また、利右衛門はここで忠兵衛に対して弁明すれば何も問題はないにも拘わらず、「おしうつむいて」いるばかりである。忠兵衛はこの態度に付け込み、さんざんに利右衛門に悪口する。ところがここでも利右衛門は「あたら男にめんぼくを。うしなはせたる我なればあてこといわふがたゝかふが。さらゝ腹はたゝぬ」と更に何も弁明しない。忠兵衛はここで「いよくむつとして」ついに「ちぎつた中をしりながらめをぬすんだはま男よ。くびならべんと脇差を。ぬきかけ」ることになる。ここでいよいよ刃傷沙汰寸前にまで及ぶこの場の緊張感が、最も高まるように仕組んでいるのである。最高潮にまで達した緊張感は、ここからようやく緩和の方向に展開する。利右衛門は忠兵衛に対し、抜きかけの脇差に縋りつき、弁明しなかつたのは金が調わず「咄しをするもはづかしさに返答はうたぬなり」と説明し、不義ではない証拠にと紙入れより一枚の紙を取り出す。その紙は梅川の親と「娘をくれる」との約束を記した証文であり、宛名は「亀屋忠兵衛」と書かせてあった。利右衛門がその証文を忠兵衛に投げつけると、忠兵衛は途端に態度を改め、「じびやうのたんきがさしおこり」と詫びるのである。更に梅川には「なんとわが身がいたづらか」と恨まれる。先ほどの抑えきれない怒りの態度は一変し、利右衛門にたいして「たゞかんにんと計にて手を合せてぞおが」むことになる。この間、観客はすべての事情を理解しているがために、忠兵衛の怒りが高まれば高まる程、もどかしさに一層気を揉むことになる。海音の表現は極めて周到に仕組まれているのである。

細かな表現に注目すれば、忠兵衛の怒りが梅川に対する呼びかけの表現にも影響していることが理解できる。一つは、忠兵衛が怒りの感情を抱いている際、梅川に対して「おのれ」と呼んでいる。

○ヲ、なまくらものゝ心からはきちがい共思ふはづおのれがやうないたづらものを切てもつゝも某が。すたりはてたる一ふんの中へ相手にたらぬなり。

○たとへおのれがあはせぬとてのめくくと帰らふかと。

これに対し、誤解が解けた後では忠兵衛は梅川に対してすべて对称代名詞「そち」という表現に代わっている。また、中之巻では冒頭より梅川について海音は「梅川」という呼称を使って表現しているが、忠兵衛が登場し梅川と出会った時、「女郎は忠兵衛を見るよりもづかづかとはしりより。ナウ待かねてゐましたといだき付をつきたをし。おれよくたけとふむ足もふるふて物はいわざりし。」というように「女郎」という表現に変えられる。また、この後すぐに「女郎やうくおきあがり扱は身請のあらましを。」というようにここでも「女郎」との呼称が使われる。このように、海音の工夫は微細な点にまで及び、忠兵衛の危険な態度を作り上げていくのである。それが為に梅川と利右衛門との対応が余計にもどかしく、歯がゆいものとして感じられることになる。

このような状況での観客の心情はいたたまれない状態に導かれるであろう。「芝居がかつた」という評価はこういった趣向を指しているものと思われるが、観客を楽しませる趣向としては十分に評価できよう。とは言え、こういった刃傷沙汰にもつながりかねない趣向は、確かに『冥途の飛脚』のような「情」に訴えかける趣向とは方向性が異なるものである。もちろん、海音もそれを承知の上で作劇しているものであろう。要するに、海音は近松の『冥途の飛脚』を利用しながらも、決して近松の方向を目指したのではなく、ここでも敢えて別の方向を目指したと考えられるのである。

四 利右衛門の機転

利右衛門の梅川身請の誤解が解け、続いて身請金に話が及ぶ。忠兵衛は持参した為替金を取り出し、身請金だとし披露する。利右衛門は「其大分の金子をはそちがぶんにてなんとして。さいかくはしたことぞ」とその金に不審を持つ。忠兵衛は問われて次のように答える。

されは是には咄し有天道人をころさずじや。今度のぼりの道づれにさるれきくとつれ立しが。長道中のうさばらし一ツばい酒のおあい手に。上るり小歌色ごとの咄しでとんと取入て。身のうへの事はなせしに二言もいわず此金を。つかへといふてかされた

この説明は如何にしても信用しがたいものであろう。『冥途の飛脚』の忠兵衛が封印を切った折、その金については「忠兵衛氣もうちやう天。前後くゝらぬまにあひむしろしきがねのこと思ひ出し。はてやかましい。此忠兵衛をそれほどたはけと思やるか。此かねは氣遣ない八右衛門もしつてゐる。養子にくる時大和から。敷金にもつてきてよそへあづけをいた金。身請のために取もどした」と説明している。ここでは「しきがねのこと思ひ出し」とあり、金額の多寡はどうであるにせよ、一応、敷金は説得的な材料だったと考えられる。しかしながらそれでも「前後くゝらぬまにあひむしろ」と表現し、さらに八右衛門はその説明を信用していないものとして展開していく。『傾城三度笠』の場合、あまりにもいい加減な作り話であり、忠兵衛の発言に対して「そくいつげなるまにあいも。舌三寸のあやまりに五尺の身をはほろぼすと」と語られる。しかし利右衛門や梅川にはその忠兵衛の説明が真実として伝わることになる。「し

らで利右衛門悦で。ていしゆくとよび立て小判の山を見せければ」とあり、利右衛門は何の疑いも持っていない。そのまま「明日ははや。かごをつらせて兩人を。むかひにこふとたわふれてよろこびわがやに」帰つてしまう。海音は作品全体の隅々にまで常に真実らしい組み立てをするということにあまり拘つていないように見える。むしろ、あまり見せ場とならない部分については、筋の運びを優先して作劇しているようにも見えるのである。その筋の運びと云うのは、梅川への身請金に關わる真相の告白である。

利右衛門が退場し、残つた梅川は身請に心浮き立ち忠兵衛に語りかけるが、忠兵衛は物思いに耽り込んだままである。その態度に腹を立て、梅川は忠兵衛に「ちか／＼御内義を。よばしやんすのもきいてゐる」と語る。梅川は許嫁のおとらのことを知つていたのであつた。忠兵衛はこの時、上之巻での観客の不審を晴らす発言をすることとなる。その発言とは、次のようなものであつた。

女ぼうもつと聞ながら。今迄しらぬふりせしはさりとほふかき心かな。跡に成たる云ぶんなれど女房よぶも敷銀に。心のつくはよくならでそちを身請のむね算用。けたがちがふてそれもけふさりとさつてしまふたりや。女房といふはそちが事

忠兵衛はおとらとの婚姻による敷金を目当てにして、梅川を身請する算段をしていたのであつた。このために、上之巻で母親がおとらに離縁状を渡して帰らせてしまったことに対し、忠兵衛が思わず当てが外れ、母親に強く非難した訳が理解されるのである。しかし、ここで忠兵衛の策略が理解された時、観客は忠兵衛に対して好意的な眼差しを送り得たかは疑問である。おとらが万一不幸な状況に陥つてしまうのであれば、忠兵衛と梅川との恋がたとえ成就したとしても、全く同情されることにはならないであろう。そこで、忠兵衛が決定的に観客に嫌悪されることがないよ

うに配慮し、おとらの恋も成就されるべく展開する仕組みが、離縁状の趣向であつたというように考えられるのである。

上之巻での観客の不審がここで解消されることになつたが、いよいよここから身請金の真相が梅川に伝えられることになる。忠兵衛は梅川に「今は何をかつゝむべき。最前渡せし身請の金。人に借たと咄せしは皆いつわりのかはせ金」と告白する。梅川は忠兵衛に來世での契りを結ぶ為、最期の準備を急ぐように促す。しかし忠兵衛は梅川に尼になつて亡きあとを弔うように宥めるのであつた。梅川は返事もなく涙を流し続けていると、そこに飛脚仲間の者たちが忠兵衛の居場所を突き止めて駆け入ろうとする。利右衛門は飛脚仲間の人々に追い付き、策略を以つて一人で忠兵衛のいる部屋に入り込む。ここでの策略は、先に忠兵衛が身請金を借りたというようなたわいな作り話ではなく、いかにもそれらしい策略となつている。利右衛門は飛脚仲間に、「やれまてかたぐ。大事をしだすふてき者。死にぐるひしてひとりてもかすり手おゝていらぬ者我には心ゆるすべし。だまして爰へつれ出ん」と言い捨てて奥に入つていった。利右衛門の策略はここだけでは終わらない。利右衛門が忠兵衛に会い、事の次第を伝えると忠兵衛は脇差に手をかけようとする。利右衛門はそれを止めて一先ずここを梅川と共に逃れるように勧める。忠兵衛は利右衛門に難儀をかけることを恐れ更に自害しようとするが、利右衛門はこのような状況に陥つたのも自分が梅川を身請しぞこなつたからだと言ひ、自害するのであれば自分が先に腹を切ると迫る。この説得により忠兵衛は納得し、梅川と共にこの場を逃れることになる。利右衛門は機転を利かせ、炭櫃を引き上げてそこから二人を落とそうと巧んだ。本来、これで梅川と忠兵衛がこの難局を脱することができれば筋の展開としては十分なものであるが、脱出する際にもう一つの見せ場がある。それは、忠兵衛が梅川と出て行く時、「落行方は大和の国落つゐたなら書道にて。さつそく御礼申

さん」と言う、利右衛門は忠兵衛を睨みつけて、

やれうろたへもの。そんなそさうなこんじやうでは身の行すへがおぼつかない。たのむたのめといひかはすぎりたがへぬはぶしのこと。かういふ我は町人じや我身に難がかゝる時。ちにまよふたらあらゆること白状せまい物でもない。命をまとのあて所とはずがたりは何事じや。やまとへ行と思ふならばりまへ行といふものぞ。あづまのたぎにおもむかはながとへくだるとかきのこせ。(後略)

と忠告する。本来この件が無くても展開としては影響はない。しかしこの利右衛門の忠告については、観客は確かにその通りだと納得し、なるほどと十分に感心する内容となっている。作品の全体構想そのものとは関わりがなくとも、場面の面白さも十分に配慮した作劇と言えよう。海音作品の面白さは、そのような海音の計算に裏打ちされた工夫によって成り立っていると言えるのではなからうか。この利右衛門の賢明な発言は、炭櫃の下から二人を落とす機転や、飛脚仲間を騙して忠兵衛梅川を落とすための時間稼ぎを成功させた機転とも通じるものであり、利右衛門の設定にも統一が図られていると判断される。

五 新七の報恩の巧み

下之巻、冒頭に「道行人めのせき」の節事が置かれ、忠兵衛と梅川は忠兵衛の故郷「みのへ村」に辿り着き、新七おとらの家に身を寄せた。新七の留守中、忠兵衛がおとらに戯れていた所、新七と新兵衛(新七の父)が戻る。新七はその態を見て不機嫌な顔つきとなり、忠兵衛に対しおとらに不義をしかけたと決め付ける。忠兵衛梅川は腹を立て

ながらも恩あることを思い、我慢して家を出る決意をする。おとらは新七の真意を量りかね、おばに自分達の命を助けられたことを引き合いに出し新七に訴えかける。しかし新七は決して聞き入れない。泣き入るおとらを見た忠兵衛は、その情けの言葉を冥途への土産としていつそ死んでしまおうと言うと、梅川もすぐに殺してくれるように頼む。忠兵衛は脇差を抜くと、新七は走りより脇差を取って捨てる。忠兵衛は新七の行為が難儀の掛かることを恐れてのことと思ひ、梅川にこの場から一緒に離れるように促す。ここで新七は二人を押し止め、障子を引き明け父親の羽織を取る。すると、父親は腕に縄を掛けられていたのであつた。ここで新七はその事情を皆に話すことになる。その事情というのは、忠兵衛梅川のことを村人が怪しみ、既に飛脚仲間知らせを出したこと。また、庄屋に新七親子が呼び出され、この事を決して話してはならないように誓わされ、その事が原因で父親が縄を掛けられたというものだつた。そこで思案を巡らし、忠兵衛に難癖をつけて落とそうとしたものであつたと告白する。忠兵衛梅川は促されるままに落ち延びようとするところ、捕り手の者が駆け入って捉えられることになる。

下之巻の仕組みもやはり謎解きの面白さが中心となつていゝと言へる。上之巻での新七の設定から見れば、下之巻での忠兵衛への言い掛かりは観客にとつて不審なものとして映る。それほどに薄情者であつたのかという不審は、大きくなればなるほどその種明かしの告白場面の面白さ・驚きが倍増する。海音の狙いはこの点に集約されていると言つてよい。その趣向を形作つてゐるものは、報恩の情である。おとらは新七が忠兵衛梅川を追い出そうとすることに對し、「みづからやこなさんのしなふと思ひさだめたる。命ふたつをおば様にたすけられたるかへしぞと。おもふがゆへにおふたりを。かくまう事も身のきたう。」と説得を試みる。また、新兵衛が縄目にあつての帰り道、新七に対して「汝が我を思ふより親の汝をおもふのは。百倍千倍まさりたり。我がなんぎをくるしみておん有友にぎりかくな。」と諭す。

この発言に後押しされて新七のこの場の巧みがなされることになっている。なお、新七は「ふう婦の者はおば君のおかげでのばはる命なれば。今兩人に成かはりいかなるうきめを見るときも。もとよりいとほぬはづのこと」とも言っている。最後に新兵衛も「いぜんの情けふのおんそんとくなしのあふむがへし」として忠兵衛梅川を落とそうとした。命を生かされたおとら新七、そしてその父新兵衛の、その恩に報いようとする意志がこの場の展開の推進力となっているのである。

おわりに

作品全体を分析しつつ、海音の意図を指摘してきた。ここで上之巻で残した問題について考えてみたい。それは二組の恋を描いた意図についてである。分裂の可能性を含みつつも、海音は敢えて二組の恋を描いた。初めに登場したのはおとら新七の二人であった。細かな表現に注意してみると、二人の恋は観客の心情からしてもほとんど同情されるべきものであった。とは言え、おとらが忠兵衛の許婚として決まった以上、その約束が優先されるべき時代でもあった。それをおとら新七の死の決意を見てとった忠兵衛の母は、その思いを察して離縁状を渡したのであった。ここで恩義は、下之巻に至って新七おとらが忠兵衛梅川に報恩することによって「相殺」されることになった。「いぜんの情けふのおんそんとくなしのあふむがへし」との新兵衛の言葉がその事を端的に言い表している。只でさえおとら新七の恋は、上之巻でまっとうされるべく仕組まれていたのであるが、下之巻に至って報恩することにより完全に非難されることのないものとなっている。それに引き替え忠兵衛と梅川の恋はどうであろうか。上之巻で忠兵衛に対する

観客の不審を煽り、短気な性格を強調した。中之巻では為替金横領を実行し、更に梅川の身請金のためにおとらとの婚姻による敷金を得ようとしたことも明らかにされた。反面、忠兵衛は周囲に対して報恩の一つもなされていないのである。これらの状況を見れば、二組の恋が如何に対照的に描かれているかが見えてくる。結局、海音はその対照性を描くために二組の恋を仕組んだと考えられるのである。その意図は、おとら新七の恋を何の罪もない極めて正常な恋として描き、その結果二人の夫婦はまっとうな生活を送り、一方梅川忠兵衛の恋をその対極として描き、最後にはその報いを受け破綻させるといふものであつたと考えられるのである。道義に沿うか、あるいは反したかが、二組の恋の行方の決め手となっているのである。

以前、拙稿「海音世話浄瑠璃「三部作」考」^⑩において、『おそめ松袂の白しぼり』、『なんば橋心中』、『八百やお七』の三作品が「滅罪」の構想を仕組んでいることを指摘した。それらはすべて二人の男女が死を以って終わるものであつた。町人の心中などは武士の切腹とは異なり、それが何らかの責任をまっとうするものではない。しかし町人が心中などで死を遂げた場合、来世で添わせてあげたいとの思いが「滅罪」（責任をまっとうする）の構想の背景にあると考えられる。これはやはり「死」という重い現実があつてのことと思われる。しかし『傾城三度笠』は死で終わらない物語である。従つて、海音は忠兵衛梅川に対して何ら滅罪の構想を仕組んではいない。利右衛門にしても、おとら新七、新兵衛にしても、一方的に忠兵衛梅川に恩を与えるだけであり、忠兵衛梅川からの報恩は仕組まれていない。道義に反した忠兵衛梅川の恋は、やはり捕まることで破綻するしか道はなかつたのである。

なお、最初に触れた海音の「事件や趣向の立て方には巧みで、おもしろい点も多いのであるが、ただそれを並列的に繋いでいくだけで、その間の劇的展開をはかるに十分でない。」との評価は、異質な二つの恋を対照的に浮かび上が

らせ、道義をもとに行く末を描き分けるという劇的展開を捉えれば、一定の評価は可能であろう。

注

- (1) 上演年次については、以下『義太夫年表近世篇』（昭和五四年一月・八木書店）による。
- (2) 浄瑠璃作品要説〈2〉紀海音篇六三頁参照。
- (3) 白方勝『近松浄瑠璃の研究』（平成五年九月・風間書房）四六九頁～四七一頁参照。
- (4) 以後、『傾城三度笠』に関する引用は『紀海音全集』（第一巻所収・昭和五二年三月・清文堂）による。なお、節付は略した。
- (5) 『今宮心中丸腰連理松』考（北海道大学文学研究科紀要第一二三号、平成一九年一月）参照。
- (6) 注3と同。四六九頁参照。
- (7) 拙稿「冥途の飛脚」考（『国語国文研究』一二二号・平成一四年一月）。
- (8) 以後、『冥途の飛脚』に関する引用は『近松全集』（第七巻所収・昭和六二年・岩波書店）、による。なお、節付は略した。
- (9) 但し、誤解が解けた後でも地の文に三か所で「女郎」という表現が使用され、「梅川」という呼称と混在している。この場合、身請の問題が強調される為、「女郎」の表現がなされているとも判断できる。因みに、身請後の下之巻では「女郎」という呼称は使用されない。その違いを見ても呼称には海音なりの配慮が見てとれる。なお、上之巻で、おとらがおぼに梅川について話した時、「新町の梅川といふ女郎と」と表現し、また、忠兵衛が母に梅川のことを話す時、「さる女郎とふつとした。ふうふやらのやうな義をいたし置候」、母親が忠兵衛に「此女郎めはおとらより。十こしてにくいやつ。」と三か所で用いられている。
- (10) 拙稿「海音世話浄瑠璃「三部作」考―〈滅罪〉の構想を中心に―」（『国語と国文学』第六九巻第六号・平成四年六月）